椎名麟三全集

10

椎名麟三全集

10

小説
10

冬樹社

椎名麟三全集10

昭和四十七年三月二十五日初版第一刷発行

著　者—椎名麟三
発行者—高橋直良
発行所—冬樹社　東京都千代田区神田神保町二—一八
　電話東京二六四—〇三四六　振替東京七七五七
印刷所—三容堂印刷株式会社
製本所—一重製本株式会社
装幀者—栃折久美子
写　真—榊原和夫
定　価—二〇〇〇円
© Rinzo Shiina 1972
0391-02010-5190

第十巻目次

事件の根拠……3
牧師の娘……49
カラチの女……63
請願書……83
悲壮な痙攣……103
盗作……137
勤人の休日……153
復縁……195
身振狂言……227
入院生活……261
善魔……285

ある献身……315
仙台の一夜……347
両面作戦……367
錆びトタンの刃……393
失踪宣告……425
不安な女……465
四人の仲間……487
私の一族……503
解説……寺田　透……539
解題……549

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小説10

事件の根拠

1

岡崎義男は、喫茶店エデンの片隅のテーブルで、ぼんやりタバコをふかしながら、誰かを殺してやろうと考えている。ただその彼にとって情ない点は、自分はそんな芸当のできる男でないということを知っているということだ。だからまた無理にでも誰かを殺してやろうと考えずにはいられないのである。彼は、深刻そうにタバコの煙をふかぶかと吐き出す。しかし誰を殺せばいいんだろう！

客が三人入って来て、せまい通路をへだてた彼の傍のテーブルをしめる。昼飯をすまして来た近くの会社の連中だ。女店員の一人が彼等のテーブルへ注文を聞きに来る。いずれもコーヒーだ。彼女は、引き上げようとして、傍のテーブルの上にある空の白いコーヒー茶碗とトーストの皿に気付く。コーヒー茶碗の底には、コーヒーの茶褐色の液体の跡をとどめているだけだし、トーストの皿はパンの粉さえ残さずに螢光燈の光を反射させていることを一瞬のうちに見てとる。しかし彼女は、それを引き上げることはできない。その前で

深刻そうにタバコをふかしている客に気付いたからだ。彼女は、カウンターへ引き返して、バーテンにコーヒーを三つ取りつぐと、三十男の方を見る。みじめな気がしていたからだ。おまけに彼女には、サービスのトーストにありつくために、その時間のきれる十一時半のほんの少し前にすべり込んで来る男の姿さえ思いうかんでいる。あの男は、近くの大島工機の社員だということだけど、きっと自分の兄と同じように安サラリーなんだわ、と彼女は考える。しかし十二時を少くとも四十分も前に会社を抜け出して来るなんて、要領がよすぎるわ。しかも空のコーヒー茶碗と、なめたようにきれいなトースト皿。その前で意味もなく三十分以上もぼんやりしつづけているやせた三十男。

客がこみはじめている。昼飯をすました勤人たちがコーヒーを飲みに来はじめたからだ。しかし義男は考えつづけている。あいつではない。あいつでない誰かを殺すのだ。ふいにコーヒーのスプーンが、彼の肘にふれて落ちたと思うと、タイルの床の上へ貧弱な音を立てる。彼は、いささか大げさすぎる溜息をついて、そのスプーンのためにテーブルの下へもぐり込まされる。傍の三人の客は、一瞬自分たちの雑談をやめて、その彼の一部始終を一様に面白そうに見ている。彼は、テーブルの下で、その三人の目を感じる。彼等にはきっと他に面白いことは何もないのだろうという気がする。彼は、テーブルの下でゆっくりそのスプーンをたしかめる。柄のところに模様があるが、結局クローム・メッキの安物だ。彼は、這い上って腰を下す。三人は、まだその彼を見ている。彼は仕方がない気がして、そのスプーンを自分の上衣のポケットに入れる。彼等三人はきっと安物のスプーンの泥棒についての話題で今日の午後を楽しくできるだろう。彼は、伝票をもち、老人のような大儀そうな恰好でテーブルをはなれる。店を出た彼は少しばかり歩道を歩く。それから右手を高々とあげながら、車の洪水のなかを悠然と信号のない横断歩道をわたって行く。

大島工作機械株式会社は、主として電気ドリルを専門につくっている。日曜大工用のそれから鑿岩機に至るまでだ。蒲田と大阪とに工場があるが、それも大きくはなく、とても大メーカーとはいえない。その本社は四谷の通りから入った自動車のやっと通れるせまい横道に向って建っている。うっかり二階建と見まちがえて通る人もいるが、ちゃんとしたコンクリート造りの三階のビルである。階下の左三分の一は車庫になっており、ピカピカ光った社長用の黒塗りの車が納まっている。製品倉庫は、本社から五、六軒の商店をおいた裏通りの角にある。だが、ときどき梱包された製品が、本社の前においてあったりするので、その一階は問屋の店先の感じだ。しかし一階は、たしかに営業部と経理部でしめられていて、二十人あまりの社員が働いているはずなのである。というのは、いまは昼休みなのだ。社員の殆んどは、檻から逃げ出すように日光のなかへ出て行き、その半分は近くの公園でキャッチ・ボールをしたり、ベンチでくだらないおしゃべりをしているはずなのである。ことに女事務員たちのベンチは、ひょうきんな男社員が割り込んで来たりすると、至極にぎやかなことになるのだ。だからいまは、階下に二、三人の社員の姿しか見えない。彼等だって将棋をやっているのだ。だが、受付の少女ひとりだけが、ちゃんと自分の職場を守っている。といっても、その前に週刊誌をひろげているのだ。彼女は、行を眼で追いながら左肩の方へ両手をあげて、そこまでやっと来る後へ垂らした髪の先を無意識にいじっているのだ。どうやらそれは独りになったとき出る癖らしいのだが、今年高校を出てここへ入社してから伸ばしはじめたというその髪は、まだ短かすぎるようなのだ。来年の今頃になれば、ぐるりと左肩越しに胸のあたりまで廻し、そこでいじることができるようになるだろう。義男は、そのような自分に絶望を感じながらも、自分もその髪の毛をいじってみたい誘惑を感じる。少女は、ちらりと週刊誌から眼をあげたかと思うと、あわててひろげたページの上を両手で蔽いかくす。

「ちがうんだよ」と義男はいう。

しかし彼女は、しっかり両手を週刊誌の上においたまま、間のわるそうな微笑をうかべているだけだ。誰かを殺さなければならないとすると、この無邪気な少女をえらんだ方がいいのかも知れない気がふと彼の胸をかすめる。

「ほんとに大丈夫だよ。何も見やしないんだから」

彼は、その自分の言葉を実証するために受付をはなれて階段の方へ行く。少女は、安心したようにもう週刊誌のページの上に眼を落している。だが両手は相変らず肩の上へあげられ、そこで髪の毛をいじっているのだ。それが誘惑と絶望とをふたたび彼にあたえる。自分は変質者なのだろうか。とにかく、あんな無邪気な少女が自分の犠牲者であってはならない。階段はせまくうす暗く、真中で直角に折れて上っている。やはりせまい二階の廊下。両端の窓から、その廊下へ光を入れている。彼はまたもや必要もない吐息をつく。階段ぎわのタイプライターの部屋も交換台の部屋もひっそりしている。彼は、総務課の前にある庶務課の部屋のドアをあける。棺のような部屋だ。しかし、そこが彼の職場なのだ。大きな課長の机が窓際にある。むろん、それは残念ながら彼の机ではない。四つある事務机の隅の一つがそれである。彼は、まぶしそうに眼をしばたたきながら、自分の机の前へ考えぶかそうに立っている。それからゆっくり椅子をひいて腰を下す。静かだ。静かすぎるほどだ。誰もいない部屋では、窓からの折角の明るすぎる外光も、空虚にしか感じられない。人手から見すてられた多くの書類のファイルも、いまは生きていない。彼は、腕時計を見る。まだ十二時半だ。

彼は両手を机の上にのせて重ねあわせ、その両手の上に自分の頭をのせる。だが、何かが彼の眠りを妨げる。彼は、思い出したようにポケットからスプーンをとり出し、それを机の抽出しのなかへ腹立たしげに投げ込む。スプーンは、抽出しのなかで異様な音を立てる。何かガラスのようなものにぶつかったような音だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

彼は、それをたしかめる。胴の丸い太鼓型のガラスのコップが雑然とした抽出しのなかにころがっている。それは、デパートの食堂から持って来たものだ。ナイフやフォークもそろっている。コンパクトもある。課長の家の鏡台の上にあったものだ。彼は、一番奥から小さな置時計をとり出して来て、ネジをまいてやる。そして置時計は無理矢理にセコンドの音を立てさせられる。それは明るい紫色に側を塗った丸型の真新しいものである。バアのカウンターの棚にあったものだ。そのカウンターの隅は、曲っていて、手をのばしたら洋酒瓶のならべてある棚にとどいたというだけの話だ。彼は、その時計を元へ戻すと、安心したようにふたたび机の上へ両手を重ね合せ、その上へ頭をのせる。その下から机の板ごしに、置時計のセコンドの音がかすかに聞える。彼は、その音にある快感を感じる。つまり、小さなものといっても盗んだのはたしかだと彼は考える。しかも、その回数も二十回を越えていることもたしかなのだ。だが、やはり人を殺す方がより決定的にはちがいない。彼はかすかな絶望を感じる。そして彼は絶望しながら、きわめて健康そうな大きないびきを立てはじめる。

突然、岡崎義男の机の上の電話が鳴る。彼は、整理中のタイム・カードから手をはなして受話器をとる。受付の少女からだ。彼女のよく透る声が受話器のなかで鳴る。

「益本さんという女の方が御面会です」

「いま忙しいといってくれ」と彼は答える。

「ちょっとでいいんだからといっていらっしゃいます」と少女は几帳面につけ加える。

彼はうんざりしながらもいう。

「よし、わかった。すぐそこへ降りて行く」

全く彼女は、四人目の彼の犠牲者だ。顔だけでも見せなければならない責任があるというものだ。彼は折れ曲った階段を急いで降りて行く。彼は、少しばかり腹を立てているからだ。受付の前で小柄な三十女が立っている。益本米子だ。和服姿で片手に花なんかをもっている。彼女は、彼を見るとにやにや笑う。実にいやな笑い方だと彼は考える。すると、怒った声が彼の口から出て来る。

「一体、何の用なんです！」

しかし彼女には、彼の怒りなんか全く通じないようだ。彼女は、小さな身体をくねらせるようにしながらにやにや笑う。

「ぼくは忙しいんだ！」と彼は、ほんとに怒った声を出す。

だが、彼女は全く平気で、媚びのつもりかにやにや笑いつづけているだけである。彼女には、義男に対する揺がしがたい自信があるらしい。何という女だろうと彼は考える。その一瞬に、彼女から聞かされただけで会ったことのない彼女の夫の顔が思いうかぶ。技術課長だという善良で有能な大会社の電気技師の顔。きちんとしたその生活。しかも彼女は自分と関係をもちながら、罪どころか何のやましさも自分の夫に対して感じていない様子なのだ。彼は幾分げんなりしながらも怒った声でいいつづける。

「何度もいったでしょ、会社へ来てもらっては困るって！　一体何の用なんです！」

だが彼女は、まるでいま寝床のなかで抱き合ってでもいるような甘えた声で囁くのだ。

「あのね、あのね、あなたの顔を見たら用事を忘れちゃったの」

彼は、怒りで度を失いそうになる。

「おくさん、ここは会社なんですよ」

「わたし、かまわないわ」

「かまうのはこっちの方なんだ！」

彼女は、社内の人々の方にも眼もくれてやらないで、彼へ秘密めいた微笑をなげかける。

「大丈夫よ」

彼には、その彼女の言葉が、こんな会社なんか大したものじゃないじゃないの、というふうに聞える。一体彼女は自分を何だと思っているんだろう。その彼に受付の少女が見える。彼女は、二人には無関心に熱心に来客者名簿の整理をしている。彼女だけは、どんなことがあっても自分の罪の対象とはしないだろうと彼は考える。すると彼に、今度の日曜にあの少女を映画へ誘おうかという考えがうかぶ。しかし、それは誘惑であってはならないのだ。益本米子は、義男の視線に気付いて得意そうな微笑をうかべる。

「あの子は大丈夫よ。ケーキを買って来てやったんだから」

彼は彼女を早く追い出さなくてはならない。

「会いたかったの」と米子は相変らずにやにや笑いながら当然そうにいっている。「わたし、いまからお花のお師匠さんとこへ行くところなの。だから、会社が終ったら、お師匠さんとこへ電話かけてね」

「ああ」と彼はいい加減な返事をする。

「あなただって会いたいでしょ」と彼女は秘密めいたものを暗示するようにいう。「だからね」

彼は、やり切れない声を出す。

「ああ」

突然、殺すとなれば、この女でなければならない気が彼にする。しかし彼はうめくようにいっている。

「しかし、ぼくはしつこい女はきらいなんだ」

彼女は、にやにや笑っているだけだ。彼のいうことなんか大して気にもとめていないらしい。彼女は、媚

びをふくんだ声で念を押す。
「じゃ、電話をかけてね」
やっと彼女は満足したように帰ろうとし、気がついたように受付の少女へ近づく。それから世故にたけた女のように挨拶する。
「いつもお邪魔ね」
少女は、あわてて立上って頭を下げる。彼は、その少女の様子を見るに耐えない気がして急いで階段を上って行く。もし誰かを殺さなければならないとするならば……。

2

闇のなかの田の畔道を少し歩かなければならない。このあたりは多摩川を越えて神奈川県になっている。そのH公団住宅のアパートへ行くには、それが近道だからだ。義男は、畔道から足を踏み外さないように用心しながら歩く。闇のなかから、もう刈り入れのすませている田もときどきあらわれて来るが、殆んどがまだ稲のままである。その穂に手をふれて見ると、思いがけなくずしりと重い手ごたえがある。近くに、林のような黒い影が闇のなかにうかんでいるように見えるが、案外何もないのかも知れない。彼は、立止って何か光るものを見定める。溝のような用水路の水があふれて、畔道へ水たまりをつくっているのだとわかる。彼は、用心してそれをとび越える。瞬間、彼は、自分のしていることの一切の意味を間ちがえているような不安が心をかすめるのを感じる。どこかでひどい誤りをおかしているような気がする。しかし、はじめたのだ。やって見るだけの話なのだ。

三棟ある公団アパートが、農家つづきの竹藪のかげからふいに浮び出す。その三階建のどの窓にも明りがついていて、彼から独立した世界がそこにあることを示しているように感じられる。それが彼に少しばかり威圧を感じさせる。彼は、必要もないのに誰かに見られるのを恐れるように右の端のアパートへ近づく。金沢八郎の部屋は、その一階の右端から二つ目の部屋だ。その窓にも明りがついていて人影らしいものがすりガラスに動いている。会はもうはじまっているのかも知れない。

金沢八郎は、机にもたれるように横向きに坐り込み、その傍の窓枠にもたれながら中学教師の大塩信一が足を投げ出している。その足の先は、赤い細縞の入った茶の真新しい靴下のなかにかくされている。義男はその靴下が気に入らない。彼は、中学教師のズボンやワイシャツやネクタイや上衣を見る。やはり彼には気に入らない。だが、中学教師は、きちんとした服装をしているだけなのだ。義男がそれをとがめるのはどうかしているのだ。だが義男は、遂にそれを口に出して残念そうにいう。

「大塩さんは、いつも品行方正の模範教師という感じだな」

大塩信一は少し赤くなってあわてて答える。

「やむを得ざる品行方正ですよ。学校の教師をしていると仕方がないですからね」

部屋の当主の八郎は、陰気な顔をして机へ横ずわりになり、左手で聖書のページを意味もなく繰っている。義男は、この男も気に入らない。中学教師とは対照的に貧乏くさい恰好をしているのだが、それが彼のポーズに見えるからだ。ベージュ色のズボンも食物の汁らしい跡が股のあたりに赤黒いしみをつくっているし、灰色のジャケツの袖口がすり切れていて、毛糸がとけかけている。いかに女房にすてられたからといって、その生活までなげやりにしてしまう必要はないだろうと義男は考える。中学教師は罪ぶかげな様子になって

いう。
「ぼくはもう帰らなければならないんです。おやじのやつ、風邪をひいて寝ているんで、代理に出ろというんですよ。ぼくの町の商店連合会のやつらは、馬鹿話が好きでね、そんな会へは出たくはないんですよ。でも、アーケードの費用の割当という金の問題にからんでいるので、母じゃだめでぼくに出ろとおやじのやついうんでね。乾物屋なんかやりたくないんで、教師になったんですが、一軒の家に一緒にいると……」と彼はちょっと神妙な顔になる。「ただぼくは、島田さんも岡田さんも今日の聖書研究会には出られないと電話で連絡があったんで、その連絡に寄っただけなんですよ」
八郎は、怒ったように聖書をパタンと音を立ててとじる。
「今日はとにかく流会にしよう！」
「そんな必要はないじゃありませんか」と中学教師は抗議する。「岡崎義男さんも来ているんだし、金沢さんと二人でもやれるじゃありませんか」
「むろん一人だってもやれるよ」と八郎はいう。
「そりゃ、集ってやるというところに聖書研究会の意味があるわけですが、でも二人いるんでしょ。二人いるということは独りということではない。大体ぼくたちは、あなたに同情して一緒に教会を脱退して来たんですよ。それなのに金沢さんはすぐぽんぽん怒って……」と中学教師はちょっと言葉をよどませる。「金沢さんは少し気が短かすぎるんですよ」
八郎は、思い屈したようにうつむいて、垂れて来る髪を深刻そうに手でかき上げる。義男は、その八郎の姿に、まるでそんな全世界の苦悩を一身に背負っているというふうな恰好をしなくてもいいだろうという気がしている。だが、八郎は山本妙子の顔を思いうかべているだけなのだ。あのとき妙子の夫がさわぎ立てて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com